

科目名	現代社会論<総論>		担当教員	現代社会論全教員		
			担当形態	複数		
テキスト	特になし。	単位数 授業形態	4単位 (各論とあわせて)	演習	開講時期	通年
<p>講義概要</p> <p>■到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現代社会を構成する様々な要素とその現状、要素間の相互関連性を理解し、意見が表明できる。 ・自分たちが生活を営む現代社会における自分の「立ち位置」(社会における役割など)を探求・確認し、自分なりに表現できる。 <p>■授業の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・選択履修する各論の学習に当たって、事前にこの総論で「現代社会」の概観を知り、考え、共有する。社会の成熟化現象を切り口に、私たちが生活を営む「現代社会」を見ていく。 ・展開される各論で扱うテーマ・内容は、それぞれ無関係にバラバラに存在するのではなく、成熟化が進む現代社会の中で相互に複雑に絡み合っているという事実を学ぶ。 ・報告や討論等を通じて、他者に自分の実践内容や考えを伝え、共有していくために必要不可欠なコミュニケーション能力を高める。 <p>■授業計画</p> <p>第1回 「現代社会論」とは</p> <p>第2回 各論担当教員から見た「現代社会」</p> <p>第3回 各論クラス選択のためのフリートーク／各論クラス選択①</p> <p>第4回 各論クラス選択のためのフリートーク／各論クラス選択②</p> <p>第5回 学生による各論クラスの授業実践についての中間報告</p> <p>第6回 学生による「『現代社会論』で学んだこと」についての報告と討論①</p> <p>第7回 学生による「『現代社会論』で学んだこと」についての報告と討論②</p> <p>第8回 学生による「『現代社会論』で学んだこと」についての報告と討論③</p> <p>第9回 学生による「『現代社会論』で学んだこと」についての報告と討論④</p> <p>■準備学習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間報告に向けた発表内容を検討し、準備を行う。 ・合同授業で学んだこと等をレポートにまとめる。 ・「『現代社会論』で学んだこと」に向けて報告内容を検討し、準備する。 <p>■評価方法</p> <p>原則、各論担当教員が担当学生分の成績評価を行う。<総論>に対する参加姿勢について気になった学生に関しては、各論担当教員に意見を出し成績評価の参考にしてもらう。</p>						
参考文献	特になし。	特記事項	特になし。			
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修	幼				
		保	教養科目			

科目名	現代社会論<各論> 「現代社会の中の犯罪－同じ社会に生きる者として」		担当教員	金子重紀																								
			担当形態	単独																								
テキスト	随時、資料を配付します。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年																						
<p>講義概要</p> <p>■到達目標 犯罪や非行について、自分達の住む社会とは別の社会の話ではなく、自分達自身にも関わる社会の問題であることを認識し、いろいろな社会の中の問題を自分たち自身で考える力を持ち、意見交換できるようになることを到達目標とします。</p> <p>■授業の概要 現代社会の中で、犯罪・非行がなぜ起きるのか、その原因を明確にすることは困難です。しかし、他方、犯罪・非行の傾向・原因は、現在の社会を反映しているとも言うことが可能です。たとえば、高齢者の犯罪が増加していることは、単に、高齢者人口が増加していることだけでは説明が付きません。少年事件の総数だけで言えば一時期より減少しているものの、再非行率は増加していることは、現在の社会の問題性を映し出しているとも言えます。 また、裁判員裁判が行われるようになり、誰でもいつ裁判員として刑事裁判（しかも重大事件の）に関わるかも知れません。刑事裁判を知っておくことが、国民の義務とも言いうる状況にあります。 本授業では、犯罪・非行の傾向を犯罪白書等で知ることとともに、なぜそのような傾向が生じるのかを考えることで、現代社会の問題性を見つめること、ひいては同じ社会の中で生きている自分たちの問題性を見つめることまでも視野にいれてともに考える授業にしたいと思います。 具体的には、刑事裁判手続、少年審判手続の概要を把握した上で、実際の刑事裁判を傍聴し（少年審判は、非公開のため傍聴できません）、犯罪白書等で現在の犯罪・非行の傾向を掴むこと、犯罪者の更生に携わる人のお話を聞き、施設を見学すること、最終的には模擬裁判を学生とともにやりたいと考えています。</p> <p>■授業計画</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回 刑事手続き・少年審判手続の概要①</td> <td>第12回 刑事収容施設もしくは更生保護施設の見学②</td> </tr> <tr> <td>第2回 刑事手続き・少年審判手続の概要②</td> <td>第13回 時代背景を知ろう（戦後の歴史）①</td> </tr> <tr> <td>第3回 講師が担当した刑事事件・少年事件の事案の紹介</td> <td>第14回 時代背景を知ろう（戦後の歴史）②</td> </tr> <tr> <td>第4回 刑事裁判の傍聴①</td> <td>第15回 自分たちで問題を解決してみよう（和解への試み）①</td> </tr> <tr> <td>第5回 刑事裁判の傍聴②</td> <td>第16回 自分たちで問題を解決してみよう（和解への試み）②</td> </tr> <tr> <td>第6回 刑事裁判の傍聴③（可能であれば、裁判員裁判）</td> <td>第17回 模擬裁判準備①</td> </tr> <tr> <td>第7回 犯罪・非行の分析①</td> <td>第18回 模擬裁判準備②</td> </tr> <tr> <td>第8回 犯罪・非行の分析②</td> <td>第19回 模擬裁判</td> </tr> <tr> <td>第9回 犯罪者・非行少年の更生のための制度①</td> <td>第20回 判決を考える</td> </tr> <tr> <td>第10回 犯罪者・非行少年の更生のための制度②</td> <td>第21回 まとめ</td> </tr> <tr> <td>第11回 刑事収容施設もしくは更生保護施設の見学①</td> <td></td> </tr> </table> <p>■準備学習 ・授業の前に、前回の授業で何をしたかについて思い出すこと。 ・授業全体が終わったときに、自分自身何を得られたかをまとめられるように意識すること。</p> <p>■評価方法 ・随時のレポート — 50% ・討論や模擬裁判への参加状況（積極的な取り組み、発言内容等） — 50% ※再試験なし。</p>							第1回 刑事手続き・少年審判手続の概要①	第12回 刑事収容施設もしくは更生保護施設の見学②	第2回 刑事手続き・少年審判手続の概要②	第13回 時代背景を知ろう（戦後の歴史）①	第3回 講師が担当した刑事事件・少年事件の事案の紹介	第14回 時代背景を知ろう（戦後の歴史）②	第4回 刑事裁判の傍聴①	第15回 自分たちで問題を解決してみよう（和解への試み）①	第5回 刑事裁判の傍聴②	第16回 自分たちで問題を解決してみよう（和解への試み）②	第6回 刑事裁判の傍聴③（可能であれば、裁判員裁判）	第17回 模擬裁判準備①	第7回 犯罪・非行の分析①	第18回 模擬裁判準備②	第8回 犯罪・非行の分析②	第19回 模擬裁判	第9回 犯罪者・非行少年の更生のための制度①	第20回 判決を考える	第10回 犯罪者・非行少年の更生のための制度②	第21回 まとめ	第11回 刑事収容施設もしくは更生保護施設の見学①	
第1回 刑事手続き・少年審判手続の概要①	第12回 刑事収容施設もしくは更生保護施設の見学②																											
第2回 刑事手続き・少年審判手続の概要②	第13回 時代背景を知ろう（戦後の歴史）①																											
第3回 講師が担当した刑事事件・少年事件の事案の紹介	第14回 時代背景を知ろう（戦後の歴史）②																											
第4回 刑事裁判の傍聴①	第15回 自分たちで問題を解決してみよう（和解への試み）①																											
第5回 刑事裁判の傍聴②	第16回 自分たちで問題を解決してみよう（和解への試み）②																											
第6回 刑事裁判の傍聴③（可能であれば、裁判員裁判）	第17回 模擬裁判準備①																											
第7回 犯罪・非行の分析①	第18回 模擬裁判準備②																											
第8回 犯罪・非行の分析②	第19回 模擬裁判																											
第9回 犯罪者・非行少年の更生のための制度①	第20回 判決を考える																											
第10回 犯罪者・非行少年の更生のための制度②	第21回 まとめ																											
第11回 刑事収容施設もしくは更生保護施設の見学①																												
参考文献	「犯罪白書」ただし、必要な統計は、随時資料として配付する。	特記事項	裁判傍聴は、東京地方裁判所もしくは千葉地方裁判所を考えている。また、施設見学（千葉県内もしくは近県）については、未定であるが、いずれも現地もしくは現地付近集合となるため、各自交通費負担となる。																									
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修	幼																										
		保	教養科目																									

科目名	「芸術を教育・福祉へ」		担当教員	明 石 現		
			担当形態	単独		
テキスト	適宜資料を配布。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年
<p>講義概要</p> <p>■到達目標 「芸術による社会貢献」に関する多くの事例を考察し、芸術が現代社会の諸問題にどのように役立てられるのかという道筋を理解し、教育、福祉の現場での具体的方策を構築することが出来る。</p> <p>■授業の概要 世界に視線を向けてみると、希望や人としての誇りに満ちた芸術活動の実践例が数多く存在していることに気がきます。その実践例を学修し、芸術が社会に如何に貢献しているかを学び合います。 音楽、写真、美術という3つのカテゴリーに分け、芸術による社会貢献の実践例を取り上げ、ディスカッションをした上で総括します。</p> <p>■授業計画 第1回 オリエンテーション 一年間の視点を共有します。 第2回 「エル・システム ～奇跡の音楽教育プログラム～」① 第3回 「エル・システム」② 第4回 「エル・システム」③ 第5回 「エル・システム」④ 第6回 「エル・システム」⑤ 第7回 「エル・システム」①～⑤についてのディスカッションと総括 第8回 「ラマラ・コンサート ～国境を越える平和コンサート～」① 第9回 「ラマラ・コンサート」② 第10回 「ラマラ・コンサート」③ 第11回 「ラマラ・コンサート」④ 第12回 「ラマラ・コンサート」①～④についてのディスカッションと総括 第13回 「報道写真家サルガド ～ある写真家が見つめた希望～」① 第14回 「報道写真家サルガド」② 第15回 「報道写真家サルガド」③ 第16回 「報道写真家サルガド」①～③についてのディスカッションと総括 第17回 「鷺田清一・語りきれないこと」① 第18回 「鷺田清一・語りきれないこと」①についてのディスカッションと総括 第19回 「荒川修作・天命反転住宅」① 第20回 「荒川修作・天命反転住宅」② 第21回 「荒川修作・天命反転住宅」①～②についてのディスカッションと総括</p> <p>■準備学習 ・各カテゴリーに関して、その社会的背景を事前に調べ概要を理解しておくこと。 ・円滑なグループ授業展開のために、事前に課された調べ学習を行い、授業後のレポートを必要に応じて提出すること。 その他、学外へのフィールドワークでの積極的な学習意欲を求めます。</p> <p>■評価方法 ・授業後のレポート — 60% ・フィールドワーク・発表 — 40% ※原則として試験は実施しません。</p>						
参考文献	・山田真一「エル・システム」教育評論社 ・小島美子「音楽からみた日本人」NHK出版 ・姜尚中「希望と絆」岩波ブックレット		特記事項	フィールドワークによる入館料、交通費等、各自負担。		
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修		幼			
			保	教養科目		

科目名	現代社会論<各論> 「短大生のワイドショー」		担当教員	佐藤隆司		
			担当形態	単独		
テキスト	必要に応じて資料配布。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年
<p>講義概要</p> <p>■到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども、家族を取り巻く社会問題、福祉制度などを理解し説明できる。 ・子ども文化の変遷を理解し説明できる。 ・家族問題、社会問題理解のための基本知識を習得する。 <p>■授業の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実際の事件、新聞記事などをレポートしてグループ・ディスカッションを通じて今日の家族の、問題と、支援体制などを検討する。 ・必要に応じて資料配布し、事件の詳細、用語の解説などを説明する。 ・保育士、幼稚園教諭として必要な基本知識と問題解決のための制度、関係機関の役割などを学習する。 <p>■授業計画</p> <p>第1回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説① オリエンテーション</p> <p>第2回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説② 「児童虐待のニュースは他人事ではない」など</p> <p>第3回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説③ 「虐待見聞きも6割『通告せず』『判断できず』『トラブルが…』」など</p> <p>第4回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説④ 「屋根より低いこいのぼり、端午の節句で柏餅を食べる理由」など</p> <p>第5回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑤ 「ハワイでの児童虐待、アメリカのホテルでの子どもの扱い方」など</p> <p>第6回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑥ 「母から子へスマホ18の約束、スマホチルドレンと向き合う大人の3カ条」など</p> <p>第7回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑦ 「宣戦布告」など(予定)</p> <p>第8回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑧ 「『シン・ゴジラ』にみる緊急事態法制」など(予定)</p> <p>第9回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑨ フィールドワーク</p> <p>第10回 前期の総括</p> <p>第11回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑩ 「日本における里親制度の現状と課題とは」など</p> <p>第12回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑪ 「赤ちゃんをネットで特別養子縁組」など</p> <p>第13回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑫ 「子どもを産んだら いくらお金が必要」など</p> <p>第14回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑬ 「暴力が暴力を生む“DV”、問題妻からDV 追い詰められる夫」など(予定)</p> <p>第15回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑭ 「中学の部活『生徒の声出しうるさい』住民の苦情に運動部は無言で練習」など(予定)</p> <p>第16回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑮ 「餅つき禁止!?!、除夜の鐘は迷惑!」など(予定)</p> <p>第17回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑯ 「年末年始のしきたり、お年玉はいくらが妥当?子どもの年齢と相場」など(予定)</p> <p>第18回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑰ 「なまはげは児童虐待、しつけ・虐待 境界はどこに」など</p> <p>第19回 社会・家庭・教育欄などの報告・解説⑱ フィールドワーク</p> <p>第20回 後期の総括</p> <p>第21回 全体の総括</p> <p>■準備学習</p> <p>授業の復習と次回授業の予習。</p> <p>「分からない」は「(何が)分からない」と明確化して授業に取り組むこととする。</p> <p>意識的に新聞、通信機器のデジタルニュースなどを視聴して最新の報道(事件、事故)を理解する。</p> <p>■評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業参加、意欲、態度、発言内容、取り組み— 40% ・レポート(提出期限厳守)— 30% ・課題(提出期日厳守)— 30% 						
参考文献	授業中、必要に応じて紹介する。		特記事項	<ul style="list-style-type: none"> ・一部、画像、DVDなどを題材にディスカッションするため積極的発言を期待する。 ・フィールドワークの交通費は自己負担。 ・私語・途中退室、電子機器使用などは使用禁止。 		
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修		幼保	教養科目		

科目名	現代社会論<各論> 「消費生活と手仕事」		担当教員	加藤次郎		
			担当形態	単独		
テキスト	特になし。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年
講義概要 ■到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・人と人のかかわりが「お金」になっていることに気づき意見がもてる。 ・人と人のかかわりを本当になくものは「こころ」であることを発見する力をもち表現できる。 ・本来あるべき人と人のかかわりの再構築に向けて自分から一歩を踏み出す（実行する）。 ■授業の概要 <p>人間の生活の基本は「衣・食・住」です。その昔「織姫」は、「棚機（たなばた）」と呼ばれる織り機を使って「衣」を自ら織っていました。「牽牛」は牛を牽き畑を耕し「食」を作り出していました。これが「七夕」の起源です。</p> <p>時をへだて、私たち現代人は気が付けば、衣も食も自分の手で作り出す能力を失くしかけています。何もかも「お金」で消費する生活になってしまったからです。</p> <p>そこで、私たちは自分の手で作り出す楽しみと喜びを再発見し、人と人との関係の再構築の必要性に気づき「生活者」として生きていくことを学びます。</p> ■授業計画 第1回 学生が考える現代社会の問題① 第2回 学生が考える現代社会の問題② 第3回 学生が考える現代社会の問題③ 第4回 グループディスカッション 第5回 今、私たちが暮らしている社会とは 第6回 大量生産・大量消費社会のもたらすもの 第7回 グローバリズムとローカリズム 第8回 スーパーマーケットと地産地生 第9回 中間発表にむけて 第10回 フィールドワーク①の事前学習 第11回 フィールドワーク① 第12回 フィールドワーク①の振り返り 第13回 フィールドワーク②の事前学習 第14回 フィールドワーク② 第15回 フィールドワーク②の振り返り 第16回 フィールドワーク③の事前学習 第17回 フィールドワーク③ 第18回 フィールドワーク③の振り返り 第19回 今、私たちにできること① 第20回 今、私たちにできること② 第21回 総論における報告にむけて ■準備学習 <ul style="list-style-type: none"> ・授業のテーマに照らして社会全体を見つめ直し自分の日常生活を振り返る。 ・今、自分になにが出来るかを考え、ちいさな一歩を踏み出す。 ■評価方法 <ul style="list-style-type: none"> ・授業へ向かう態度（フィールドワークや討議での積極的な取り組み、発言内容等） — 50% ・試験及びレポート — 50% 						
参考文献	「ヒトに問う」双葉社		特記事項	フィールドワークの交通費の自己負担があります。		
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修		幼			
			保	教養科目		

科目名	現代社会論<各論> 「子ども家庭福祉」		担当教員	小木曾 宏		
			担当形態	単独		
テキスト	適宜資料を配布。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年
<p>講義概要</p> <p>■到達目標 社会的養護と子ども家庭福祉という視点から、現代の子ども達の現状を多角的に理解できること。具体的には「子ども虐待」「ストリートチルドレン」等の実態について理解し、フィールドワークを通してより確実な知識を得て、自己の活動、今後の自己実現の一助とすることを到達目標とする。</p> <p>■授業の概要 ・理念と現状―「子ども虐待」問題を中心に考える・外国の状況を知ることで日本の現状を比較検討する。(ビデオ教材等使用) ・制度と実践―児童福祉実施体制について理解する。(機関連携の実際・施設見学・福祉従事者の講義) ・方法と技術―具体的に学生諸君が「現場」において、活用できる援助の方法と技術を、事例、ロールプレイングを通して学ぶ。 現代社会において、子どもや家庭、そして学校等で起きている「被虐待」や「問題行動」に対し、多角的に考える場としたい。そして、具体的に福祉的援助・関わりとは何かも考える。援助技術としても子どもの問題の「原因」「結果」を追求するのではなく、我々も「主体」であるという視点から子どもとの「より良い関係」づくりを、探っていく。 事例検討、施設見学、福祉現場に従事する方々(ゲスト・スピーカー)のお話をお聴きすることで、児童福祉領域の理解を深め、将来の保育士として、実践につながる授業としたい。</p> <p>■授業計画 <子どもの現状> 第1回 「養護」「不登校」「被虐待」「非行」について① ビデオ視聴、ゲストによる講義 第2回 「養護」「不登校」「被虐待」「非行」について② 第3回 「養護」「不登校」「被虐待」「非行」について③ 第4回 「養護」「不登校」「被虐待」「非行」について④ 第5回 「養護」「不登校」「被虐待」「非行」について⑤ 第6回 「養護」「不登校」「被虐待」「非行」について⑥ <制度と実施> 第7回 講義と施設見学(児童福祉施設・児童相談所等)① 「子ども虐待」に関する法律、制度を学び、できれば施設を見学する 第8回 講義と施設見学(児童福祉施設・児童相談所等)② 第9回 講義と施設見学(児童福祉施設・児童相談所等)③ 第10回 講義と施設見学(児童福祉施設・児童相談所等)④ 第11回 講義と施設見学(児童福祉施設・児童相談所等)⑤ 第12回 講義と施設見学(児童福祉施設・児童相談所等)⑥ <方法と技術> 第13回 家族療法的アプローチ① 実際の事例を通して、子ども、家族の理解と援助のあり方を学ぶ 第14回 家族療法的アプローチ② 第15回 家族療法的アプローチ③ 第16回 家族療法的アプローチ④ 第17回 ストリートチルドレンの現状と支援について① 第18回 ストリートチルドレンの現状と支援について② 第19回 ストリートチルドレンの現状と支援について③ 第20回 各論のまとめと総論の発表準備① 第21回 各論のまとめと総論の発表準備②</p> <p>■準備学習 ・授業で指定した課題に取り組んだ上で、次回の授業に出席のこと。 ・児童福祉領域について状況を理解すること。 ・フィールドワークの際、積極的に質問事項を考えること。 ・その他、必要に応じて課題の提示に取り組むこと。</p> <p>■評価方法 ・授業に対する意欲(討議への積極的な取り組み、発言内容) — 20% ・レポートとその内容 — 30% ・施設見学への参加及び取り組み — 50%</p>						
参考文献	小木曾・宮本・鈴木編「よくわかる社会的養護内容」ミネルヴァ書房		特記事項	施設見学の交通費の自己負担があります。		
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修		幼保	教養科目		

科目名	現代社会論<各論> 「サウンドスケープ：音との対話 自分との対話」		担当教員	よしなか あつし		
			担当形態	単独		
テキスト	「音さがしの本」春秋社	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年

講義概要

■到達目標

- ・「聴く」という人間の行為についての理解を深め、自分なりの意見をもてる。
- ・音やその表現からDiversity (多様性) を捉え、自分なりの意見をもてる。
- ・自分や社会にとっての音 (音楽) のあり方を考え、自分なりの意見をもてる。

■授業の概要

音とは何でしょうか？ 人間の生活、あるいは生きるということにおいては、音との関係を無視することはできません。私たちが行う音とのかかわり方としては、1. 音を発する。2. 音を聴取する。という2種類があげられますが、私たちの日常生活における音との関係はこのようにはっきり分けられるようなものなのでしょうか。

私たちにとって音を聴くということは、いったいどのような行為なのでしょう。もちろん視覚的に音を捉えることはできません。しかし、音は私たちに何かしらの感覚を残してくれます。また音は帰属性が高く、音源 (音の発生源) を特定されやすい性質があるのです。「これは誰が出した音なのか？」と。もしその音源が特定できなくとも、音そのものが音源 (発信者) の性格や機能、あるいは職種までも表現してみたり、また音を聴取する者 (受信者) にとっては、その音源と関わるための概念やルールまでも提供するかのようなのです。

この授業は、音に対する私たちの挑戦です。いったい私たちは音とどのように付き合っているのか？ その音との関係を振り返りながら音というものについて改めて考えると同時に、現代という音環境で生活する私たちについて見つけ直すための「音の実験室」です。音をあつめたり、音を作ったり、音に訊いたりしましょう。そして自分自身の感覚によって音を捉えながら、生きることに對する肯定感を高めていきましょう。

■授業計画

第1回	オリエンテーション 3分間スピーチ	第12回	音の視覚化：デザイン
第2回	エンカウンターゲーム	第13回	プレゼンテーションおよびディスカッション
第3回	音と文化 音楽と文化①	第14回	音から見る自分史①：作成の説明 (内容 項目 体裁など)
第4回	音の実験室①	第15回	音から見る自分史②：項目別ディスカッション
第5回	ブラインドウォーク	第16回	音と文化 音楽と文化②
第6回	リスニングウォーク①：キャンパスの音	第17回	クリスマス文化と音 (音楽) ①
第7回	マッピングおよびディスカッション	第18回	クリスマス文化と音 (音楽) ②
第8回	音の実験室②	第19回	クリスマス文化と音 (音楽) ③
第9回	リスニングウォーク②：静けさとは	第20回	クリスマス文化と音 (音楽) ④
第10回	プレゼンテーションおよびディスカッション	第21回	まとめ
第11回	リスニングウォーク③：自分が出す音		

■準備学習

1. 授業のふりかえりとして、毎授業後レポートをEvernoteに提出すること。
2. 毎授業終了時、次回のテーマについての説明を行う。それについてのイメージや所感などをレポートとしてEvernoteに提出すること。
3. 1および2をもとに、インターネットメディアを通じて事前に授業担当者とディスカッション (やり取り) を行うことがある。

■評価方法

- ・授業時間内における意義ある雑然の構成 — 30%
- ・準備学習の取り組みおよび課題レポート等の提出 — 40%
- ・当事者意識を持ったクリエイティブな発想 — 30%

参考文献	授業時間内に指示。	特記事項	受講条件 ・何事にも興味を持って取り組める姿勢を持っていること。 ・自分自身の生活やライフスタイルに意識を高く持っていること。 ・基礎的な音楽理解とコンピューター等の知識があること。
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修	幼	
		保	教養科目

科目名	現代社会論<各論> 「現代社会と関係する方法」		担当教員	渡辺 泰子																																														
			担当形態	単独																																														
テキスト	必要に応じプリント配布。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年																																												
<p>講義概要</p> <p>■到達目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人と関心を共有する喜びを積み重ね、コミュニケーション能力を身につけ、実践できる。 ・フィールドワークを通し、美的判断/価値基準の起源を理解し、自分の意見を対象化する。 ・現代社会における効率優先、成果優先のスピードに惑わされぬ心の豊かさをもち、自分なりに検討できる。 ・自分がどのように現代社会と関わっているのかを知り、これからの未来を築く1人としての自覚を持つ。 <p>■授業の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間を通して「伝える・受ける」演習を繰り返し行っていく。演習は2人1組で、一方が(1)伝える、そしてもう一方がそれを(2)聞きとり(3)描きとり、そして双方で(4)共有するという4ステップを基本とする。簡単な図形情報を伝えることから始め、徐々に写真や絵画等を用いることで伝達情報の濃度をあげていく。後期にはフィールドワークと連動させることで、「全員で各個人の作品の鑑賞経験を共有する」場をつくっていく。 ・フィールドワークは、都内を中心とした美術館・博物館、天命反転住宅(三鷹)を予定。 ・毎回授業内で書くレポートを最終的にまとめ、最終プレゼンテーションを行う。 <p>■授業計画</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回</td><td>演習計画・自己紹介の準備</td> <td>第12回</td><td>フィールドワーク②</td> </tr> <tr> <td>第2回</td><td>自己紹介</td> <td>第13回</td><td>レポート発表</td> </tr> <tr> <td>第3回</td><td>写真史 撮る／撮られる関係について</td> <td>第14回</td><td>フィールドワーク③</td> </tr> <tr> <td>第4回</td><td>写真 学内で写真実習</td> <td>第15回</td><td>レポート発表</td> </tr> <tr> <td>第5回</td><td>写真発表</td> <td>第16回</td><td>フィールドワーク④</td> </tr> <tr> <td>第6回</td><td>中間報告会準備</td> <td>第17回</td><td>レポート発表</td> </tr> <tr> <td>第7回</td><td>ゼミ内でテーマを設定する</td> <td>第18回</td><td>最終プレゼンテーション</td> </tr> <tr> <td>第8回</td><td>美術史①</td> <td>第19回</td><td>総論にむけて準備①</td> </tr> <tr> <td>第9回</td><td>美術史②</td> <td>第20回</td><td>総論にむけて準備②</td> </tr> <tr> <td>第10回</td><td>フィールドワーク①</td> <td>第21回</td><td>授業のまとめ</td> </tr> <tr> <td>第11回</td><td>レポート発表</td> <td></td><td></td> </tr> </table> <p>■準備学習</p> <p>授業内で作成するレポートは最終プレゼンテーションに使用することとなる。常に年間の授業のつながりを自らに問いかけながら、自分のレポートの振り返りを行っておくこと。</p> <p>■評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポート — 50% ・授業内での取り組み(討議への積極的な取り組み、発言内容等) — 50% 							第1回	演習計画・自己紹介の準備	第12回	フィールドワーク②	第2回	自己紹介	第13回	レポート発表	第3回	写真史 撮る／撮られる関係について	第14回	フィールドワーク③	第4回	写真 学内で写真実習	第15回	レポート発表	第5回	写真発表	第16回	フィールドワーク④	第6回	中間報告会準備	第17回	レポート発表	第7回	ゼミ内でテーマを設定する	第18回	最終プレゼンテーション	第8回	美術史①	第19回	総論にむけて準備①	第9回	美術史②	第20回	総論にむけて準備②	第10回	フィールドワーク①	第21回	授業のまとめ	第11回	レポート発表		
第1回	演習計画・自己紹介の準備	第12回	フィールドワーク②																																															
第2回	自己紹介	第13回	レポート発表																																															
第3回	写真史 撮る／撮られる関係について	第14回	フィールドワーク③																																															
第4回	写真 学内で写真実習	第15回	レポート発表																																															
第5回	写真発表	第16回	フィールドワーク④																																															
第6回	中間報告会準備	第17回	レポート発表																																															
第7回	ゼミ内でテーマを設定する	第18回	最終プレゼンテーション																																															
第8回	美術史①	第19回	総論にむけて準備①																																															
第9回	美術史②	第20回	総論にむけて準備②																																															
第10回	フィールドワーク①	第21回	授業のまとめ																																															
第11回	レポート発表																																																	
参考文献	特になし。	特記事項	自己負担 ・スケッチブック代(授業初日にて指定、次週より使用) ・写真実習のプリント代 ・フィールドワークでの出費(交通費/チケット代/食事等)																																															
卒業・免許状・資格との関連	卒業必修	幼																																																
		保	教養科目																																															

科目名	現代社会論<各論> 「まちあるき」から社会を考える」		担当教員	鷲野 宏		
			担当形態	単独		
テキスト	適時資料を配布。	単位数 授業形態	4単位 (総論とあわせて)	演習	開講時期	通年

講義概要

■到達目標

- ・「まちあるき」から都市を見る目をもつこと。
- ・都市という現象と社会との関係を結びつけることができ、まちづくりについて議論できること。
- ・ものごとの成立の背景に、多様な価値観の存在を認識すること。

■授業の概要

この各論では、「まちあるき」を通して、都市という現象と社会との関係を考えます。都市に現れるデザインと時代との関係を探るためのいくつかの視点をもとにして、具体的な都市でのフィールドワークをおこない、両者の関係を体感していきます。体感をもとにグループワークによる議論・考察をおこない、考察した結果をまとめあげる作業をおこないます。運河をゆく船上からの視点やサウンドスケープ（音の風景）の視点も体験します。

■授業計画

- 第1回 都市を考えるための視点
- 第2回 運河からみるまちの体験「名橋たちの音を聴く」※5/13実施予定
- 第3回 ワークショップ：運河からみたまちについての議論と考察
- 第4回 都市づくりのしくみ（都市法・条例）
- 第5回 まちあるき：都市法からみる幕張新都心（計画されたまち）
- 第6回 ワークショップ：幕張新都心についての議論と考察
- 第7回 都市の比較
- 第8回 歴史的建築物の意匠と歴史的建造物の保存
- 第9回 まちあるき：日本橋～丸の内（歴史の積層されたまち）
- 第10回 ワークショップ：日本橋～丸の内のまちについての議論と考察
- 第11回 まちとアートの視点
- 第12回 モダニズム建築論
- 第13回 まちあるき：代官山ヒルサイドテラスと祝祭 ※10/8または10/9に実施
- 第14回 ワークショップ：代官山のまちについての議論と考察
- 第15回 作庭や日本建築にみられるサウンドスケープの視点
- 第16回 サウンドスケープ・ワークショップ
- 第17回 価値の積層としての都市・日本橋を多様な視点から考える
- 第18回 まちあるき・日本橋というまち（時代ごとに異なる価値観の集積としての都市）
- 第19回 ワークショップ：日本橋のまちについての議論と考察 1
- 第20回 ワークショップ：日本橋のまちについての議論と考察 2
- 第21回 ワークショップ：日本橋のまちについての議論と考察 3

■準備学習

フィールドワークの体験を通じて、まちのかたちと時代や制度との関係を調査・考察してくること

■評価方法

- ・フィールドワークレポート — 30%
- ・ワークショップでの議論の積極性等 — 40%
- ・ワークショップレポート — 30%

卒業・免許状・資格との関連	卒業必修	特記事項	フィールドワークの一部は休日に実施。（雨天などで日程変更の可能性あり） フィールドワーク場所への交通費がかかります。 レポートは原則A4用紙1枚にまとめること。
		幼保	教養科目